



B94  
223  
:26

# 民國佛教期刊文獻集成補編

任繼愈題

## 第 26 卷



臺灣佛教

二十 月 號

臺灣省教育廳圖書館

發行 中國書店

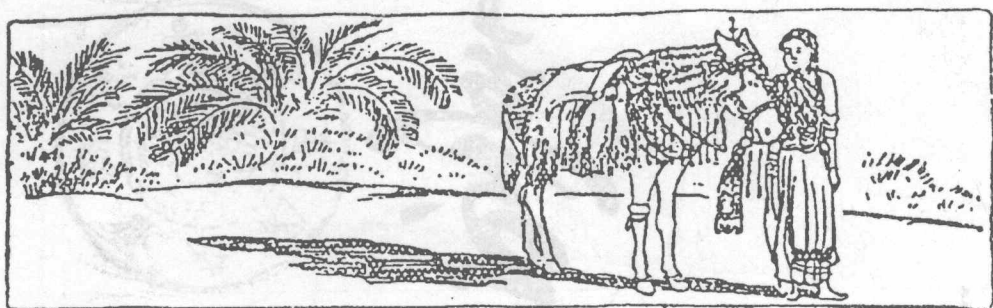
# 臺灣佛教



號 月 二 十

內課會社局教文府督總海臺

行 發 會 教 佛 灣 臺

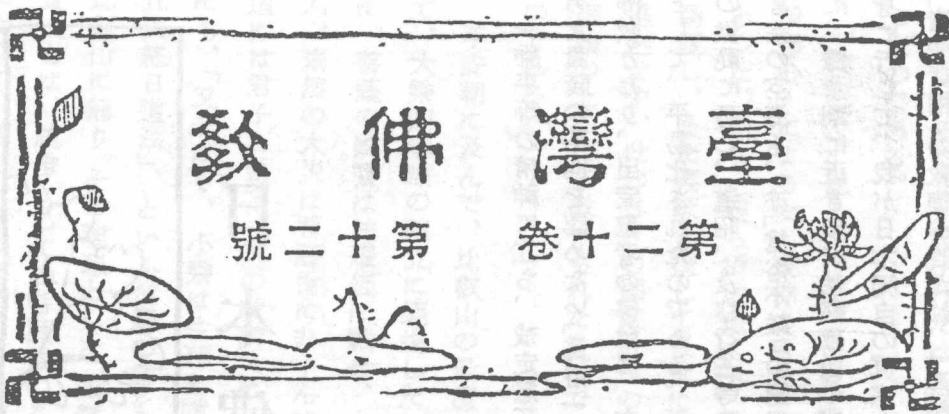


## 次 目

|                  |    |
|------------------|----|
| △ 卷 頭 言          | 一  |
| △ 日本佛教の實踐        | 二  |
| △ 禪と日本人          | 八  |
| △ 青年と佛教          | 一三 |
| △ 「和」            | 一五 |
| △ 在家佛教思想開展に關する小考 | 一九 |
| △ パーリ文化研究のゆくて    | 二五 |
| △ 漢 詩            | 四〇 |
| △ 雜 報            | 四一 |
| △ 會 費 領 收        | 四二 |

# 臺灣佛教

第十二卷 第二十二號



想ひ起す、昭和十六年十二月八日、帝國海軍部隊は西南太平洋に於て米英海軍と戦闘状態に入りりとあの日の朝のラジオの聲が、今もなほ耳の底に力強く響いて居る。滿身に溢み互る緊張感、痺れる様な感激を永久に忘れる事は出来ぬであらう。戦後して居つた總身のしこりを一時に吹き拂つた様な晴々しい氣持を味つたのである。

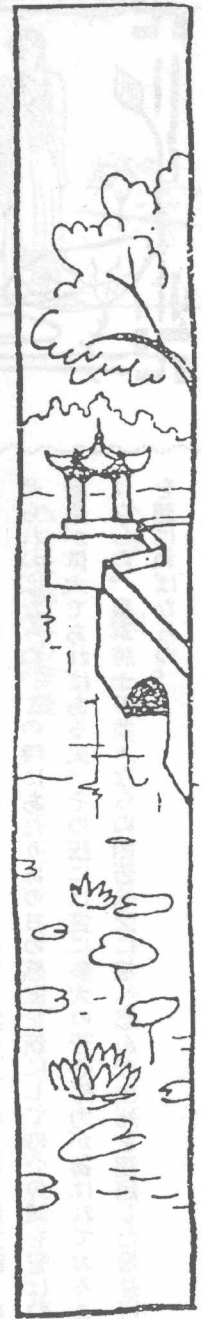
かくて米英聯軍の戦端開かれてよりこゝに一周年、大詔奉戴の感激をいま新にして、我等一億、鐵石の決意をいよいよ固めるのである。願れば一年前のこの日の時、對米英宣戦の大詔頒發せられたその瞬間、日本全國を蔽ふた感激の嵐に肅然と襟を正して誓し冥想、遂て米英聯軍の聖戰に必死突入したのであつた。

それから一年、われ等は夥しい戦果の發表に幾度び驚嘆したことか。正毅の劍は狡猾の醜を踏みにじつて大道を切り開いた。かくて大東亞の形勢は一變したのである。

劈頭ハワイ大空襲により米太平洋艦隊を全滅し、かへす奴でマレー沖に英の兩巨艦を強襲撃沈して電光影裡大東亞の海を制したのである。續いて香港に、マレー半島に、比島に、東印度諸島にあげられた赫々たる戦果は全世界を驚倒し、開戦後半歳を出でずして大東亞の全地域より敵國勢力を驅逐し去つたのである。斯る大捷の歴史が又とあらうか。

而も戦果の後には層々と大東亞建設の大偉業が進められて居るのである。

かゝる情勢の中にわれ等は今茲に開戦第二年を迎へたのである。戦争はいふまでもなく未だ決定的段階に到達したとは言ひ得ず、今後長期に互る絶大なる武力戦、建設戦が繰續せられねばならぬ。この時にあたりあの日の感激を新にして奉公の誠を誓はねばならぬ。戦果が偉大であればある丈、その際には實に多大の苦心努力が拂はれておることを忘れてはならぬ。皇軍將士の並々ならぬ困苦缺乏に堪へ忍んだ生死を超越した捨身行のあつた事を想はねばならぬ。



## 日本佛教の實踐

花 山 信 勝

一乗平等の精神に立ち、戒定慧三學圓頓の内容を以て現れた我が「日本の佛教」は、當然、出家と在家との區別を廢し、男女貴賤の差別を認めない「眞俗一貫」の佛教として、發展することゝなつた。したがつて、山村洞窟の佛教は、都市村落の佛教となり、出家聖者の佛教は、在家凡夫の佛教となり、學問修道の佛教は、一般庶民の日常生活の中に見出される佛教として、平易化されたのである。而してそれは、既に「和國の教主」と崇められたまふ聖德太子の、示したまへる眞俗一體の洪範に發し、道昭、及び行基等の實踐僧を経て、平安朝に天台宗の景澄は、「眞俗一貫」の佛教を眞正面から主張し、眞言宗の空海も、亦「眞俗不離」の國民教化を身を以て實踐し、空也、及び良忍等は、天下に遊行して念佛の實行を教へ、遂に、鎌倉期に近き頃、法然は山の道場を下りて、民間に易行の念佛をすゝめ、親鸞は、更に在家本位、肉食妻帯の教旨を身に行じて、我が日本独自の眞宗を開くことゝなつたのである。「法華經」や、「般若經」、「維摩經」等の大乘經典の中には、「諸法實相」の教理が説かれ、「涅槃經」や、「勝鬘經」、その他一乗の諸經典の中には、「一切衆生悉有佛性」、或は「如來藏

法身」等の思想が説かれたけれども、それ等の高尚な教理の實踐は、我が日本の佛教に來て、始めて實現されることゝなつたのである。

『法華經』に説く「治世產業皆是實相」の教理、『維摩經』に説く在家菩薩の「諸法實相」の生活、竝に『勝鬘經』に説く「自性清淨心」による女人成佛の自覺を、教理として説き示すと共に、また身を以て實踐の上に示したまへる方が、聖徳太子であつた。即ち、親ら攝政皇太子として、天皇に代り國家の萬機を總攬したまひつゝ、その身を以て或は天皇御前に佛典を講讀し、また義疏を撰して後世に貽したまうたのである。前にも述べた如く、謂はゆる閑處の修禪を廢し、現實の世間を逃避せず、此の日々の國家社會の生活に處しながら、そこに諸法實相の理を觀じ、以て正己正他の大道を歩めよ、とたゞ理論の上に於て教へられたゞけでなく、太子自ら範を示したまうたところに、我が日本の「眞俗一貫」の佛教がはじまつたのである。

平安朝に及んで、比叡山の最澄が、圓頓三學の立場から、眞の國、實たる菩薩僧の養成を理想とし、自ら小乘戒を棄捨して、大乘圓頓戒の確立に邁進したことは、既に述べたが、その時、彼が嵯峨天皇に上つた「四條式」の中に、「竊かに以るに、菩薩の國寶は法華經に載せ、大乘の利他は摩訶衍の説なり、彌天の七難は法華經に非ずんば何を以てか除くことを得ん、未然の大災は菩薩僧に非ずんば豈に冥滅することを得ん……國寶國利、菩薩に非ずして誰ぞ、佛道には菩薩と稱し、俗道には君子と號す、其の戒廣大にして眞俗一貫す」と述べて、謂はゆる「眞俗一貫」の佛教を主張し、その後「顯戒論」の中にも、「又云はく、小乗は生死を障隔するが故に光を和すること能はず、大士は善惡旨を齊しく、道俗一貫するが故に終日凡夫終日道法」といふ僧肇の言を引いて、『法華經』の諸法實相の立場を明かにした。しかし、彼は支那の天台山を模して比叡山に籠り、その理想とした「國寶」の養成にも、亦専ら住山修練十二年の行を必須條件とした。故に、彼の謂はゆる「國寶」とは、純僧としての菩薩僧のことで、彼が當時の社會に於ては、未だ支那佛教の模倣から完脱することが出來ず、したがつて、僧俗一貫の實質的日本佛教とまでには至らなかつた。即ち、比叡山の佛教が、謂はゆる山の佛教であり、學の

佛教、出家僧の佛教として止まつたわけである。しかし、「圖教の出家は、形は出家すと雖も、小類に預らず、小儀を假らず」と斷じて、ひたすら精神的菩薩僧の養成につとめた事實を出發として、しだいに鎌倉に見るやうな、眞の「眞俗一貫」の佛教が生み出されることゝなつたのである。

眞言宗の空海も、亦修禪の道場としては、邊鄙な高野山を選定したけれども、都の東寺を中心として、國家のために、新たに傳へた密教の弘通をはかつた。殊に、その教理は、華嚴の深遠な知識を以て組織したけれども、事相の儀式によつて、國家、及び社會と接近し、曼荼羅の圖畫によつて、幽玄な思想を端的に圖現し、また灌頂の作法によつて、即身成佛の秘義を具體的に授けたのである。殊に、一般庶民を對象としてはじめた綜藝植智院は、「佛經を傳へ」る道の師と、「外書を弘め」る俗の師とを以て、教育を施さうとしたものであつて、謂はゆる「眞俗不離」の關係に於て、佛教を國民の間に生かすことに努めた。

平安朝も末期に近づいた頃、最澄の開いた叡山に學び、謂はゆる山修山學、脫俗出家の佛教から、在家止住の國民佛教を打ち開いた者か、即ち日本淨土宗の開祖たる、「愚癡の法然房」であつた。承安五年の春三月、法然四十三歳を以て、久しく住みなれた叡山を下り、自力聖道の諸行をふりすて、他力念佛の易行門に歸入したとき、こゝに始めて、我が日本の國民佛教が、事實上打ち建てられることゝなつたのである。一切衆生の平等往生を目標とした、彌陀の本願力の前には、男女老少をきらはず、道俗貴賤を簡ばず、上盡一形、下至一聲の念佛を以て足れりとする。而もその念佛は、行住坐臥の如何を問はず、時處諸縁を論ぜざる、眞俗一貫の稱名念佛である。「深重の本願と申すは、善惡をへだてず、持戒破戒をきらはず、在家出家をもえらばず、有智無智をも論ぜず、平等の大悲をこしてほとけになり給ひたれば、たゞふかく本願を信じて念佛申さば、一念須臾のあひだに、阿彌陀ほとけの來迎にあづかるべき、」であつて、「聖人の念佛と、世間者の念佛と、功德ひとしくしてまたくかはりめあるべきでない、」と説かれた。ここに、始めて出家と在家との區別がとりはられ、人間は、一樣の價值の上に置かれることゝなつた。即ち、日本佛教の基本たる一乘思想が、三學具足の念佛を通して、

實人生の上に開顯せられたのである。

しかるに、法然にあつては、なほ未だ自ら出家の僧形をまで、廢したのではなかつた。しかるに、その法然をうけた弟子親鸞は、進んで、在家非僧の佛教を、身を以て實踐したのである。即ち彼は、「自力聖道の菩提心、こゝろもことばもおよばれず、常没流轉の凡愚は、いかでか發起せしむべき」と深く内觀して、非僧、非俗を標榜し、愚禿の二字を以て姓とし、妻子眷屬をもち、左家人と變らぬ生活の中に、彌陀の本願他力を仰信したのである。法然を仰いで「眞宗興隆の太祖」とし、自らは「親鸞は弟子一人もよたす」といふ立前から、その信者を、ひとしく「御同朋、御同行」と呼んだ。殊に彼が、聖德太子を仰いで「和國の教主」と呼びたてまつり、謂はゆる「非僧非俗」の生活を實踐したところに、我が日本佛教の眞面目が發揮されるやうになつた。爾來、親鸞を祖として、眞宗が興隆し、時の流れにしたがつて、廣く行はれるやうになつたのであり、その眞宗中興の祖師蓮如は、「當流親鸞聖人の一義は、出家發心のかたちを本とせず、捨家棄欲のすがたを標せず」、「わが心の惡きをも、また妄念妄執のこゝろの起るをも止めよといふにもあらず、たゞあきなひをもし、率公をもせよ、獵すたど、漁うしをもせよ、」等と教へて、眞俗二諦一貫の宗教を、わかり易く國民の間に説き弘めた。

日本曹洞宗の開祖道元は、平安朝以來行はれた天台、眞言の密法や、當時盛んに流行した淨土念佛門の勤き等とは眞反對に、ひとり繁昌の都市を逃れ、國家の權勢に近づくことをとめて避けつゝ、邊鄙な越前の山中に立て籠つて、極端な出家佛教を標榜したのである。即ち、「一代の化儀、すべて在家得道せるものなし、これ在家いまだ學佛道の道場ならざるゆゑなり」、「聖教のなかに在家成佛の説あれど正傳にあらず、女身成佛の説あれどまたこれ正傳にあらず、佛祖正傳するは出家成佛なり」、「出家すべからずといふともがらは、造逆よりもおもき罪條なり、調達よりも猛惡なりといふべし、」等と説いて、あくまで「出家」本位の佛教に立つた。しかしそれは、彼が當時の佛教の實際面に對する、深刻な批判から、釋尊正傳の佛教へ立ち還らうとした、當然の結論であつたとともに、また四海五湖の間にたゞ一人の先師と仰いだ、天童如淨の教風に由來したものであつた。しかし、彼はその反面に於て、「日本國ひとつのわらひごと、」として、叡山や、高野山

に於ける女人禁制の結界を難じ、成佛の道に於ては、男女平等、人間本具の佛性に差別なきことを、強調したのである。以て山中に坐しながら、「一日の身命は、たふとぶべき身命、」此の一日は、おしむべき重寶、」と弟子を説へて、一箇半箇の養成につとめたことが、將來彼の禪風をして、弘く我が國民の間に普及せしめることとなり、修證一等は、同時に眞俗一貫の佛教として、ひろく行はれることとなつたのである。

更に道元に一步おくれて、安房の清澄山に出家した日蓮は、「一切衆生、悉是吾子、」の慈悲を、「一天四海、皆歸妙法、」の願業に見出し、「王法佛法に冥し、佛法王法に合して、王臣一同に本門の三大秘密の法を持ち、」天下萬民、諸乘一佛乘と成つて、萬民一同に南無妙法蓮華經と唱へ幸る、」ことを以て理想とし、道俗男女貴賤をへだてず、ひろく一閭浮提の萬民を相手として、唱題成佛の宗を打ち立てたのである。而して、これ亦「眞俗一貫」の佛教として、廣く我が國民の間に行はれるやうになつた。

また法然の法孫聖達から、念佛の奥儀を受け、建治元年熊野社に參籠して、「六字名號一遍法、十界依正一遍體、萬行離念一遍證、人中上々妙好華、」の一頌を感得し、自ら「一遍」と號して全國を遊行し、十六年の間に二十五億一千七百二十四人を勸進して、念佛を國民の間に弘通したといはれる智眞の「時」宗は、平生を即ち臨終の時と心得て、行住坐臥の日常に念佛することを勧めた「眞俗一貫」の佛教である。又、元亨元年石清水八幡宮の靈告により、融通の印信を承けた良尊は、遠く良忍の「一人一切人、一切人一人、一行一切行、一切行一行、是名他力往生、」の念佛宗を繼承して、諸國を巡化し、眞俗男女融通の大念佛を弘めたのである。

我が日本の佛教に於ても、亦もとより「出家」を標榜し、「沙門」を名としたけれども、それはその本來の意義とは可なり相違したものであつた。現實の國家や、國民を超越した出家、沙門ではなく、彼等の精神は、常にその國家國民の上に置かれてゐたのである。したがつて、彼等が單に宗教や、思想の方面からだけでなく、國家、社會のあらゆる面に於て、現實國家の向上發展につとめた行跡は、偉大であつた。就中、道昭、行基、最澄、空海、重源、容尊、忍性等の如きは、そ

の尤なるものと云つてよい。したがつて、彼等はたとへ出家、沙門たる相の上に於て、和國教主の聖德太子と相違あつたとしても、その眞俗一貫の行に於ては、全く太子の御先蹤を繼承したものと云つてよい。後世から、彼等の或る者が、太子の再來と仰がれたといふことも、全く理由がなかつたのではない。殊に、親鸞の如きは、出家、沙門の形を本とせず、非僧非俗の相に於て、その信行を國民の間に弘めたのであり、その宗風はよく榮えて、現に見るが如き本願寺教團となつたのである。今日では、眞宗以外の各宗に於ても、亦「出家」とは名ばかりであつて、實質的には「眞俗一貫」の道を行つて居るのである。覺證の道は、現實生活の外になく、生死の現實は、即ち涅槃の理想であり、煩惱の氷は、そのまゝ菩提の水である。そこには、修と證のへだてがなく、況や出家と非出家との區別はない。道、俗不二、男女平等、國民一切の日常行爲に即して、成佛を説く諸法實相、是れぞ即ち眞俗一貫の日本佛教である。

# 禪と日本人

古田紹欽

## (一)

禪が我國に初めて傳へられたのは道昭によつてであり、それは今からおよそ一千三百年の前のことである。道昭の禪は支那禪宗の第五祖弘忍の下に慧能の南宗禪と神秀の北宗禪とに分立したいはゆる、南嶺北漸の北宗漸禪に屬するもので一般に禪宗と呼ばれてゐる慧能系統の南宗頓禪とは大いに異なるものである。

北宗禪は神秀とその弟子の普寂との頃には支那では一時榮えたが我國では所傳間もなく衰滅して一宗としての形を保つまでに至らず、教化の民衆に及ぶといふことはほとんどなかつた。北宗禪の系統としては道昭に續いて他に普寂の弟子と思はれる道瑤の來朝があり、道瑤から行表を経て

傳教大師にその法が受け繼がれたのであるが、これまた獨立の一宗とはならなかつた。

憶ふに禪が獨立の宗としての建立を見たのは榮西・道元以後のことである。日本の禪宗といへば普通にこの南宗禪の所傳からいふのである。榮西は仁安三年に久しく絶えてなかつた入宋の志を立て、天台山に至り、一旦歸朝して文治三年には再び入宋して南宗禪の王家七宗に分れたその一たる黃龍派の禪を傳へた。

南宗禪は傳教大師の時代からこの榮西の入宋の時代までに義空・能先・覺阿・能忍といった人達によつて率ぜられたことも全くないではなかつたが、その禪は興隆に至らず北宗禪の場合と同様に間もなく亡んで仕舞つたのである。榮西の禪は密教的な性格を多分にもつもので、榮西自身

も密教の葉上流一流の祖ともせられるのであるが、歸朝後、激しい舊佛教即ち比叡山の壓迫のなかに禪の二宗を開くことに献身の努力を拂つた。時には舊勢力と協調し、時には敢然と抗争した。古い傳統の殻から新しいものが生れるにはいつでもその殻を破るために異常の努力が必要とせられるものである。

榮西の著した興禪護國論を見ると正傳の佛法たる禪を弘通するために幾多の論難に對して血を吐くやうな叫びが繰り繰げられてゐる。時には謗言によつて追はれんとしたこともあり、時には天災すらも榮西の所爲の如くにいはれて放逐せられんとしたこともあつた。しかしながら如何なる迫害に遭遇しても立教開宗の目的が國家的見地に立脚した興禪護國に存じ、單なる一宗一派の興隆といふことを眼目とするものではなかつたからして榮西のこの燃ゆるやうな信念を挫き沮むことは何人も出来なかつたのである。

世にあるものは榮西が開山始祖となつた建仁寺が台密禪の三宗の道場として禪院の外に眞言・止觀の二院を構へたことからその禪が純粹でなかつたことを難するのであるが、しかし我が日本禪の出發が國家佛教の性格を顯著にも

つたことに對して禪の本質がたとへ明確でなかつたにせよ誠にこの一事を以て誇るべきであると思ふ。榮西には確かに日本人としての禪があつた。單に支那大陸に榮えた禪を輸入するといふだけではなかつた。

## (二)

榮西は我が臨濟禪の宗祖と考へられるのであるが、榮西及びその門下の明全に従つた曹洞禪の始祖なる道元は一層禪の日本化といふことに力を盡くした。道元は榮西と同じく入宋して天童如淨の法を傳へて歸朝したのであるが榮西が禪の確立のために外面的な世俗の問題に拂つた努力の大なるに對して道元はむしろ内面的に禪を深めて行つた。道元には榮西の興禪護國論のやうな著述はなかつた。しかしながら流麗なる行文に著はされた老大な體驗の記錄は興禪の護國たるべき趣意を身を以て示したものに外ならないのである。

正法眼藏以下の多くの著述に見られるやうにその禪は誠に純粹高潔なものであつた。京都から越前の山奥に隠れ、敢て權力の外護を受けようとせず、永平一山の清規を嚴正

にし、簡素の生活に甘んじて衆と共に道業を成した心境は一點の曇もなく澄み切つた大空のやうであつた。それは我が民族の固有精神としての大和心が清く直く明るく正しきものといはれる如く、道元は日本人の心を確に心としたものであつた。

有名な話であるが、玄明なるものが北條時頼より永平寺領寄進の書狀を受けて勇躍して永平道元の許に歸つた所、その玄明の志を卑しんで寺門の外に擯斥し、その坐する牀まで截り取り、榻下の土七尺までを掘り捨てたといはれる。あるひは後嵯峨上皇より紫衣を賜ふに容恩固辭に及ぶも許されず、拜受しては謹んで高閣に奉じ終生黒衣の一沙門としてそれを身に着くことがなかつたとも傳へられてゐる。『食は足ることを知るべく、衣は儉約なるべし』とは道元の衆を誡めた言葉であるが、名聞利慾を退けて自らその通りの生涯を送つた。

佛法は人を得れば則ち顯れ、人を得なかつたならば則ち隠るものであるといはれるがこの格言は眞理である。佛法はインドに起り支那に傳へられて幾度びその眞理が説かれたが、禪佛教の一場合を見ても榮西・道元の如き禪が果し

て他國に存じたであらうか。支那は文字の國と呼ばれ多くの禪文學を生んで中外に喧傳されたが、それは思想的な禪であつて生活の禪ではなかつた。よしそれが生活の禪であつたにしても國家生活に根ざした禪ではなかつた。

榮西・道元を始祖とする日本禪宗はその法孫において幸に祖道を守り、民族生活に即した禪愛國の至情に溢るゝばかりの獨自の禪を形成したのである。

元菴に器許せられた京都正傳寺の僧東巖慧安は元寇の國難に際して石清水八幡に敵國降伏の祈願をした。慧安のよんだと傳へられる「末の世の末の末まで我國は萬の國にすぐれたる國」の歌はその烈々たる愛國の至情を述べたものである。虎關はまた我國國土の醇淑なるを説いて「支那者大醇而有小疵、日本者醇乎醇者也」となし、皇統運綿として他邦に絶する我が皇國體なることをいつてゐる。

### (三)

禪は成程、歴史的傳統としては支那傳來のものであるがこの禪精神が果して輸入ものであらうか。元寇の國難を打開した北條時宗は歸化の禪僧たる圓覺寺の開山無學祖元に

従つて訓陶を受けたのであるが彼が祖元より得た禪の悟道は敢然として元を討つといふことであつた。禪は梵語のデイヤーナで禪定であるが日本の禪定はいはゆる坐禪の型に填つた禪定でなく、融通無礙のもので抽象的に日本人を遊離して考へられるやうなものではなかつた。時宗が若し小乗禪師のやうに山に籠つて禪觀に耽けることを以て禪なりと考へたならば元寇の難を克服することはあるひは困難であつたかも知れない。

支那には國の興亡を外にして悠々と山谿を放浪し、幽境を求めて禪坐する僧侶が何時の時代にも少くなかつたが、さうした禪は個人主義的な逃避の禪で百害あつて一利すらなく無爲自然の虛無思想を助長し、反つて國家的統一をさまたげるものである。斯様な禪は如何に高い境涯を究めようと我國には不必要であるし、また存在することを許さぬものである。

菊池武茂は「武茂弓箭の家に生れて、朝家に仕ふる身たる間、天道に應じて正直の理を以て家の名をあげ、朝恩に浴して身を立せんことは三寶の御免されを蒙るべく候。その外私の名聞を欲のために義を忘れ恥を顧みず、當世にへ

つらへる武士の心をながく離るべく候」と一族一門に武人の心構を教誨してゐるが、その熱烈なる忠誠の精神は大智の禪的訓育によつて益々強きを加へたものと見られる。大智は一日一夜の振舞が佛祖の行持に違はざることを教へてゐるが、この一日一夜が平常心是道の修養に外ならないのであつて「二十年三十年も及び一生もの一日一夜にて候なり」といつてゐる。武茂の一生は誠にこの一日一夜の忠誠に終始したのである。

本來日本人は家持の歌に「海ゆかばみづく屍山ゆかば草むす屍大君のへにこそ死なめかへりみはせじ」とある如くに君のためには死を賭する事を顧みないのである、日本の禪は君國を愛し、君國のためには強く深く死ぬることを一層説き示した。支那の禪が多く文學と結び生を樂しんだのに對して日本の禪は不思議にも武と結んで死に親しんだのである。

生死の兩關に立つ場合、生と死の何れを選ぶべきかといへば葉隱のうちにもあるやうに死を選ぶが日本人である。葉隱はこの日本人の心を代辯して次の如くにいつてゐる。「武士道といふは死ぬことゝ見付けたり。二つ／＼の場に

て早く死ぬかたに片付くばかりなり。別に仔細なし云々  
と。さうしてその死も反省的な分別的なものでなく狂死す  
をやうな死でなければならぬとしてゐる。

狂死は凡そ名聞利欲を離れたもので常住死身になり切つ  
てゐることである。死は欲得の雜念に縛せられてゐる限り  
死んでも死に切れないものであらう。日本禪は命を駄ぐべ  
き一朝有事に際してもあるひはあらん限りの努力を拂ぐべ  
き平常時に際しても不斷に先づ以て己を殺し己を空しくす

ることを教へてゐる。顧るに現代の知識人は餘りにも個勢  
に捉はれてゐはしまいか。

將に大東亞戦争はこれからである。我々は滅私奉公の精  
神を實踐にうつし、舉つて楠公の七生報國そのまゝの決意  
を固めねばならないのである。寔にかうした非常時局に臨  
んで國民練成の一教學としてインド・支那に倣れたる日本  
禪の在することを喜ぶものである。



隨想

## 青年と佛教

無哲道人

大東亞と敢へて言はんでもよい、  
先づ足下の吾等が周圍を見ても佛教  
は殆んどその大部分を占めてゐる。  
最近も一時は廢佛みたような風氣が  
あつたりしたが、今日ではも早やそ

んな輕はずみや排他獨善的な小人は  
居なくなり、日本といひ日本人とい  
ふ大乘人本來に立ちかへつて來、寧  
ろ佛教は今や大東亞戰とゞにももの  
ましく實味のある展現と眞値を發揮し

つゝある。當に佛教はその本來の眞  
面目を遺憾なく展培發現すべき秋に  
直面してゐる。その爲めでもあらう  
か隨所に佛教への聲を聞くようにな  
つた。好ましく又歡ばしいことであ  
る。

しかしながら、今この秋にして、  
現在と將來は兎も角、往年の佛教を  
考へて見るに、それは、只管來世の  
方便の爲めの佛教であり、老人の爲  
めの佛教であつたような氣がする。  
従がつて來世には未だ遠く元氣に充  
ちた若い者、即ち青年男女には縁遠  
く、若し青年男女にして佛教とか佛  
事とか（或はそれが研究聞法行實等  
に至るまでも）を行言でもして居よ  
うものなら世間の人々から寧ろ奇妙  
なことに考へられ、年寄り臭いと